東京スポーツ
TOKYO SPORTS PRESS
昭和35年4月2日第3種郵便物認可
A版
3月15日（金曜日）14日発行
©東京スポーツ新聞社2013年
第17099号 日刊（但し日曜休）
www.tokyo-sports.co.jp
東京スポーツ新聞社
東京都江東区越中島2丁目1番30号 〒135-8721
電話代表 編集(03)3820-0831 販売局(03)3820-0811 広告局(03)3820-0821
関西支社 堺市堺区松屋大和川橋3丁132番地
中部支社 名古屋市北区金城4-3-19
西部支社 福岡市中央区天神2の14の8
振替口座 00120-2-93236

遺体が放置された部屋などを回復させる

特殊清掃 知られざる実態

資格認定スタート

悲惨な痕跡が残る。そんな現場を清掃する「特殊清掃」という仕事が存在する。このほど、その専門知識を養成する講座と、民間の認定資格が誕生した。年間自殺者は全国で約3万人、孤立死は6万人以上といわれる現代日本社会で、需要が高まる特殊清掃の実態とは――。

キツ過ぎる現場と高収入

「誰もやりたくない仕事」だが…

特殊清掃とは、遺体が放置された部屋やゴミ屋敷などの環境を回復させる専門的な仕事だ。一般社団法人「事件現場特殊清掃センター」（北海道千歳市）は、現場などで適切な対処をする専門家「事件現場特殊清掃士」の通信養成講座とともに、その資格認定をスタートさせた。

自殺と孤立死を合わせた総数は全国で年間9万人以上。ゴミ屋敷は500軒につき2～3軒（0・4％）あるとされる。高齢者の単身世帯増加に比例して孤立死の件数も年々増加しているが、特殊清掃従事者の数は全国にわずか1500人（同法人調べ）しかいない。1人で60件の仕事をこなす計算だ。もちろん、需要は高まる一方だ。

同法人の理事事務局長小根英人氏（36）は「正直、誰もやりたくない仕事」と言う。

理由は長期間放置された遺体が部屋に残す強烈な異臭に他ならない。精神的ダメージも大きい。

「臭いに慣れることはない。仮に慣れてしまうと『自分は精神的に異常？』と思ってしまう。死について考えすぎるとおかしくなるし、食欲減退することもある」と小根氏は、苦しそうに現場の悲惨さ、過酷さを語った。

「昨夏、75歳の男性が布団の上で孤立死したアパートでは、死後5日に異臭騒ぎとなって遺体が発見された」。体液が布団を突き抜け、厚さ5センチのフローリングをふやかして波打たせ、下のコンクリートまで届いていた。

特殊清掃士の現場。自らの感染予防にも神経を使わねばならない

もちろん汚き、不浄きがある仕事だが、良いこともある。依頼者の遺族や不動産オーナーからは「私たちにできない仕事をしてくれた」と涙ながらに感謝される。それがやりがいとなるのだ。

「完全に人のためにする仕事。誰かがやらなくてはいけないから…」（同氏）

一方、料金体系などで依頼者と業者がもめることもある。目安としては2LDKの間取りで100万～150万円、1DKで70万円前後が相場。感染予防対策や適切な機材利用法を甘く見たために重大なトラブルを招くこともあるという。

「注射針を誤って踏んでC型肝炎に感染した人もいた」（同氏）

資格を制定することで、業界に統一基準が設けられることは、依頼者と業者双方に意義がある。講座開設後、事業展開を目指す人々が資格取得に動き出している。つらい仕事だけに月給は30万～50万円と高水準だ。所属する会社にもよるが、3～4年勤務すれば年収1000万円に達する人もいるという。（塚田賢慎）